

Time periodic solutions to the Navier-Stokes equations in the rotational framework

高田 了 (京都大学 大学院理学研究科)

3次元全空間 \mathbb{R}^3 および時間全区間 \mathbb{R} において, 次の Coriolis 力付き Navier-Stokes 方程式の時間周期問題を考察する.

$$\begin{cases} \frac{\partial u}{\partial t} - \Delta u + \Omega e_3 \times u + (u \cdot \nabla)u + \nabla p = f & x \in \mathbb{R}^3, t \in \mathbb{R}, \\ \operatorname{div} u = 0 & x \in \mathbb{R}^3, t \in \mathbb{R}, \end{cases} \quad (\text{NSC})$$

ここで, $u = u(x, t) = (u^1(x, t), u^2(x, t), u^3(x, t))$ および $p = p(x, t)$ はそれぞれ流体の速度場と圧力を表す未知関数であり, $f = f(x, t) = (f^1(x, t), f^2(x, t), f^3(x, t))$ は与えられた時間周期的外力である. また, $\Omega \in \mathbb{R}$ は軸 $e_3 = (0, 0, 1)$ の周りでの回転の角周波数に対応した定数である. $\Omega = 0$ の場合が通常 Navier-Stokes 方程式となる.

本講演では, 時間周期的外力 f に対する (NSC) の時間周期解の存在と一意性について考察する. 特に, 通常 Navier-Stokes 方程式 ($\Omega = 0$) と比較した場合に, 回転の影響によって外力項 f に対する仮定が弱められることを示す. 本講演では, Kozono-Nakao [2] に従い, 次の積分方程式を満たす解について考察する.

$$u(t) = \int_{-\infty}^t T_\Omega(t-s) \mathbb{P} f(s) ds - \int_{-\infty}^t T_\Omega(t-s) \mathbb{P} [(u(s) \cdot \nabla)u(s)] ds \quad t \in \mathbb{R}, \quad (\text{IE})$$

ここで, $\mathbb{P} := (\delta_{ij} + R_i R_j)_{1 \leq i, j \leq 3}$ は Helmholtz 射影作用素であり, $\{T_\Omega(t)\}_{t \geq 0}$ は次で与えられる (NSC) の線形方程式に対応した半群である (Hieber-Shibata [1]).

$$T_\Omega(t)f = \mathcal{F}^{-1} \left[\cos \left(\Omega \frac{\xi_3}{|\xi|} t \right) e^{-|\xi|^2 t} \widehat{f}(\xi) + \sin \left(\Omega \frac{\xi_3}{|\xi|} t \right) e^{-|\xi|^2 t} R(\xi) \widehat{f}(\xi) \right].$$

また, $\{R_i\}_{i=1}^3$ は Riesz 変換を表し, $R(\xi)$ は次で定義される歪対称行列である.

$$R(\xi) := \frac{1}{|\xi|} \begin{pmatrix} 0 & \xi_3 & -\xi_2 \\ -\xi_3 & 0 & \xi_1 \\ \xi_2 & -\xi_1 & 0 \end{pmatrix} \quad \xi \in \mathbb{R}^3 \setminus \{0\}.$$

積分方程式 (IE) を考察するに当たり, 問題となるのが積分区間 $(-\infty, t)$ における時間積分の収束性である. 通常 Navier-Stokes 方程式 ($\Omega = 0$) を一般次元 \mathbb{R}^n において考察した場合, 空間次元 n が高いほど熱半群 $e^{t\Delta}$ の時間減衰が速くなるため, 時間無限遠での可積分性が得やすくなる. Kozono-Nakao [2], Yamazaki [3] [4] においては, $n \geq 4$ の場合, ある $1 < p, l < \infty$ に対して $f \in BC(\mathbb{R}; L^p(\mathbb{R}^n)) \cap BC(\mathbb{R}; L^l(\mathbb{R}^n))$ という仮定の下, Navier-Stokes 方程式の時間周期解の存在が示されている. しかし, $n = 3$ の場合, 時間無限遠での可積分性を得るために, $f \in BC(\mathbb{R}; L^l(\mathbb{R}^n))$ かつ, ある $F = \{F_{ij}\}_{1 \leq i, j \leq 3} \in L^p(\mathbb{R}^3)$ に対して $f = \operatorname{div} F$ という仮定が必要となる. また, 全ての空間次元において, 外力項に対する小ささの仮定が必要である.

本講演では、空間3次元において Coriolis 力の影響が働く場合 ($\Omega \in \mathbb{R} \setminus \{0\}$) に、外力項に対する $f = \operatorname{div} F$ という仮定が不要であること、更に、回転速度 $|\Omega|$ が十分大きい場合に、外力項に対する小ささの仮定が不要であることを示す。

主結果を述べるにあたり、いくつかの記号を導入する。 $C_{0,\sigma}^\infty(\mathbb{R}^3)$ は \mathbb{R}^3 上で定義されたコンパクトな台をもつ C^∞ 級ベクトル値関数 $\phi = (\phi^1, \phi^2, \phi^3)$ であって、 $\operatorname{div} \phi = 0$ を満たすもの全体の集合とする。 $1 < r < \infty$ に対し、 $L_\sigma^r(\mathbb{R}^3)$ を $C_{0,\sigma}^\infty(\mathbb{R}^3)$ の $L^r(\mathbb{R}^3)$ -ノルム $\|\cdot\|_{L^r}$ による完備化とする。また一般の Banach 空間 X に対して、 $BC(\mathbb{R}; X)$ を X に値をとる \mathbb{R} 上の有界連続関数全体からなる集合とする。

定理 1. 指数 r, q, p, l は次を満たすとする。

$$\frac{5}{2} < r < 3, \quad 2 < q \leq \frac{12}{5}, \quad \frac{1}{3} + \frac{5}{3r} < \frac{1}{p} < 1, \quad \frac{5}{3q} < \frac{1}{l} < \frac{1}{q} + \frac{1}{3}. \quad (1)$$

このとき、ある正定数 $C = C(r, q, p, l), K = K(r, q, p, l)$ が存在して、任意の $\Omega \in \mathbb{R} \setminus \{0\}$ と任意の時間周期的外力 $f \in BC(\mathbb{R}; L^p(\mathbb{R}^3)) \cap BC(\mathbb{R}; L^l(\mathbb{R}^3))$ で

$$\sup_{t \in \mathbb{R}} \|f(t)\|_{L^p} + \sup_{t \in \mathbb{R}} \|f(t)\|_{L^l} \leq C \min \left\{ |\Omega|^{1+\frac{3}{2r}-\frac{3}{2p}}, |\Omega|^{\frac{1}{2}+\frac{3}{2q}-\frac{3}{2l}} \right\} \quad (2)$$

を満たすものに対し、外力 f と同じ周期をもつ (NSC) の時間周期解 $u \in X_K$ が一意に存在する。ここで、

$$X_K := \left\{ u \in BC(\mathbb{R}; L_\sigma^r(\mathbb{R}^3)) \cap BC(\mathbb{R}; \dot{W}^{1,q}(\mathbb{R}^3)) \mid \|u\|_X \leq K \right\}$$

であり、そのノルムは次で定義される。

$$\|u\|_X := \sup_{t \in \mathbb{R}} \|u(t)\|_{L^r} + \sup_{t \in \mathbb{R}} \|\nabla u(t)\|_{L^q}.$$

注意 2. 指数 (r, q, p, l) に対する仮定 (1) より、外力項 f に対する大きさの制限 (2) における $|\Omega|$ の冪は正となる。従って、任意の $f \in BC(\mathbb{R}; L^p(\mathbb{R}^3)) \cap BC(\mathbb{R}; L^l(\mathbb{R}^3))$ に対して、回転速度 $\Omega \in \mathbb{R} \setminus \{0\}$ を十分大きく取れば、(NSC) は一意的な時間周期解 $u \in X_K$ をもつことが従う。

定理 1 の証明においては、半群 $T_\Omega(t)$ に対する線形評価が重要となる。特に、回転による振動項に対応した作用素

$$\mathcal{G}_\pm(\tau)[f](x) := \mathcal{F}^{-1} \left[e^{\pm i\tau \frac{\xi_3}{|\xi|}} \mathcal{F}[f] \right] (x) = \int_{\mathbb{R}^3} e^{\pm i\tau \frac{\xi_3}{|\xi|} + ix \cdot \xi} \widehat{f}(\xi) d\xi \quad x \in \mathbb{R}^3, \tau \in \mathbb{R}$$

に対する分散型評価を導出することが証明の鍵となる。振動項 $\mathcal{G}_\pm(\Omega t)$ に対する分散型評価および熱半群 $e^{t\Delta}$ による平滑化効果を用いることにより、一般の外力 f に対して、積分方程式 (IE) の右辺第一項における時間積分の収束を示す。

尚、本講演の内容は、中央大学の岩渕司氏との共同研究に基づくものである。

参考文献

- [1] M. Hieber and Y. Shibata, *The Fujita-Kato approach to the Navier-Stokes equations in the rotational framework*, Math. Z. **265** (2010), 481–491.
- [2] H. Kozono and M. Nakao, *Periodic solutions of the Navier-Stokes equations in unbounded domains*, Tohoku Math. J. (2) **48** (1996), 33–50.
- [3] M. Yamazaki, *The Navier-Stokes equations in the weak- L^p space with time-dependent external force*, Math. Ann. **317** (2000), 635–675.
- [4] ———, *Solutions in the Morrey spaces of the Navier-Stokes equation with time-dependent external force*, Funkcial. Ekvac. **43** (2000), 419–460.